

よみがえる記憶

守安 収

先日、ふと思い立って家内共々関西へ。目指すは大阪市立中之島美術館での「佐伯祐三」展。心ゆくまで楽しむことができました。作品自体が優れモノであることはもちろんですが、学芸員の意気込みと頑張り、そして作家や作品に注いだ「愛」の強さも相俟って素晴らしい展覧会に仕上がっていました。わが館でも来館者の心に響く展示を心がけたいと思います。その会場を出たところで地元紙の文化部長のOさんが家族連れで来館していることに気づきました。新幹線に乗って親子で訪れた展覧会のことを小学生の彼はずっと覚えていることなのでしょう。▼続いて中之島香雪美術館で「修理のあとにエトセトラ」展。私はかつて「名品とともに楽しむ表装の美」展(2008年)を担当したことがあります。それは「表装」の技術、作品本体との取り合わせの妙を紹介するものですが、こちらは主に修復のビフォーアフターを提示するというもの。興味深い展示構成で、こういう切り口も見習わなければと思った次第です。観覧中、不意に私どもが開館前から表具をお任せした墨申堂山内啓左さんのことが脳裏に浮かびました。山内さんは鬼籍に入られましたが、私どもの館の表装が褒められるのは氏のお陰です。▼翌日は、小学3年生まで過ごした奈良県五條市へ。榮山寺八角円堂(国宝)を拝観した後、60年ほど前に住んでいたところや通った小学校(今は統合、移転)を探したものの、結局わからぬままで、妻には記憶力ゼロと侮られる始末。でも、帰り道に美味しそうな和菓子屋さんへ立ち寄ると、「どちらから？」という声掛けを発端に同世代の女主人との昔話に花が咲き、懐かしい記憶がよみがえってきました。



〒700-0814 岡山市北区天神町8-48
TEL 086-225-4800 FAX 086-224-0648
Email kenbi@pref.okayama.lg.jp
https://okayama-kenbi.info

交通案内 JR岡山駅後楽園口(東口)から
・徒歩約15分
・路面電車 東山行「城下」下車徒歩約3分
・宇野バス 四御神、瀬戸駅、片上方面「表町入口」下車徒歩約3分
・岡電バス 藤原団地行「天神町」下車すぐ

開館時間 9:00—17:00(入館は16:30まで)
「美術の夕べ」実施日と夜間開館日は19:00まで(入館は18:30まで)

休館日 月曜日(休日の場合その翌日)/年末年始/展示替え期間中

※一部の公共交通機関では新型コロナウイルス感染拡大に伴い、一部運休している場合があります。ご利用の際は事前にご確認くださいませようお願いします。

編集後記

中西ひかる

数年間世界を騒がせた新型コロナウイルスも、国内の感染症法上の位置づけが「5類」に変わり、厳しかった対策が各所で緩和されてきました。それは美術館・博物館も同じで、現在進行形で石橋を叩きながらガイドラインの変更を進めています。今のところ、当館内では来館者のマスクの着用は任意となりましたが、これからも多くの皆様に安心して、そして快適にご利用いただけるように、一部対策の継続と段階的な緩和に取り組んでまいります。夏には宮内庁三の丸尚蔵館の収蔵品を紹介する特別展も催しますので、お出かけの際は、ぜひお気軽にお足運びください。

収蔵品の紹介 Vol. 12

平柳田中《鏡獅子》(部分)
昭和33(1958)年
木彫、彩色
高さ 58 cm



皇室ゆかりの日本絵画

橋 凜(学芸員)



図1: 円山応挙《牡丹孔雀図》1776年 宮内庁三の丸尚蔵館 [後期展示]

この夏、岡山県立美術館では「美をたどる 皇室と岡山～三の丸尚蔵館収蔵品より」と題し、宮内庁三の丸尚蔵館の所蔵作品を紹介する特別展を開催します。

三の丸尚蔵館は、皇居の東御苑の一角にある施設です。平成元(1989)年に、天皇陛下(現・上皇陛下)と昭和天皇の皇后である香淳皇后により、代々皇室に受け継がれてきた美術品類が国に寄贈されたことを機に、その収蔵管理・公開を目的に平成5年に開館。その後も皇室から国への寄贈品などが加わり、現在では約9,800点の作品を収蔵します。

本展では、同館の作品約80点に岡山県立美術館所蔵の関連作品約10点を加え、「中近世日本書画」「近代日本画」「近代日本洋画」「近代彫刻・工芸」をそれぞれ紹介する4章構成で、皇室ゆかりの多彩な美術作品について時代を追いながら展覧します。特に、岡山出身作家による作品や、江戸時代の岡山藩主である池田家に伝来したものなど、さまざまな観点から岡山との関係の深い作品が各章に展示されます。貴重な作品をご覧いただくとともに、美術を介した皇室と岡山とのつながりを感じる機会となれば幸いです。

本稿では、筆者が主に担当した第1章後半から第2章の作品、江戸時代後期から近代の日本絵画のうち、特に注目していただきたい作品をご紹介します。

1. 円山応挙《牡丹孔雀図》

本展覧会のメインビジュアルに採用された、円山応挙《牡丹孔雀図》(図1)。

円山応挙(1733-95)は江戸時代後期の京都において、景物を本物らしく写しとり描く「写生画」で一世を風靡した絵師です。応挙の「写生画」を語るうえで欠かせない画題が孔雀であり、本作は応挙の孔雀画の代表的な作例のひとつ。華やかでありながらも、画面全体としては静けさや品格をまとった、非常に応挙らしい作です。

令和元(2019)年に当館で開催された特別展「江戸の奇跡・明治の輝き—日本絵画の二〇〇年」で展示された、同じく円山応挙による同画題作品(《牡丹孔雀図》相国寺蔵、明和8(1771)年)を覚えている方もいらっしゃるかもしれませんが、両者は孔雀の図像がほぼ一致しますが、相国寺本の5年後に描かれた本作では、縦長の画面のちょうど対角線上に、振り向く雄孔雀を配置することで飾羽を強調。牡丹や太湖石といったモチーフを画面左下にまとめる簡潔な構成となっています。また彩色も微妙に異なっており、本図はより濃密な印象を受けます。

本作の大きな見どころはモチーフそれぞれの質感を的確に表す丁寧な描写や、繊細で鮮やかな彩色です。群青、緑青、金、墨などの顔料を駆使して緻密に再現された孔雀の全身の羽毛や、咲きこぼれる牡丹の柔らかな色使

い、なめらかな輪郭線など、鑑賞の際はぜひ細部までじっくりご覧下さい。

2. 橋本雅邦《龍虎図》

明治時代以降、皇室および宮内省は美術工芸の保護や奨励に様々な場面で公的に関わるようになります。例えば内国勸業博覧会や内国絵画共進会をはじめとした展覧会への行幸啓が行われ、買い上げられた作品は皇室の収蔵品となりました。また日本独自の文化・技術を海外へアピールするため、明治政府が力を注いだ明治33(1900)年のパリ万国博覧会では、国内外の博覧会で唯一、皇室および宮内省が組織的に関わりました^{*1}。出品作品は明治天皇の御下命のもとに制作が依頼され、明治23(1890)年に任命された帝室技芸員をはじめとした、23名の作家が腕を振るいました。

本展に出品される橋本雅邦《龍虎図》(図2)は、パリ万博出品作のうち的一点。橋本雅邦(1835-1908)は幕末から明治期に活躍した狩野派の絵師で、フェノロサの思想に共鳴し新たな日本画表現を模索した人物として知られます。代表作に、明治28(1895)年の内国勸業博覧会に出品され、斬新な表現で画壇に衝撃を与えた《龍虎図》(静嘉堂文庫美術館蔵)があります。こちらは雷光や波濤などで非常に派手な演出がなされていますが、それと比べると4年後に描かれた同画題の本作は、非常に落ち着いた印象を受けます。また従来の多くの龍虎図が、一対の屏風や一対の掛け軸の左右に虎と龍をそれぞれ配するのに対し、本作では額装の一面に両者を取めている点に特徴があります。



図2: 橋本雅邦《龍虎図》1899年 宮内庁三の丸尚蔵館 [後期展示]

当時の日本ではまだ珍しかった額装が採用されたのは、欧米の出品基準では屏風や掛け軸の形式が「美術品」として認められなかったため。また手前の虎を明瞭に描き、対峙する龍を奥に薄く描く構成は、両者の間に奥行きのある空間を生み出し、西洋的な絵画空間に落とし込む意図があったとされています^{*2}。

2頭の配置や、空間の作り方。各モチーフで新たな描き方を試みた部分や、従来の描き方を踏襲した部分。パリ万博に伝統的な画題の絵画を出品するにあたり、雅邦が画面の隅々に凝らした工夫や意図を推測しながら鑑賞するのも、楽しいかもしれません。また明治天皇の御下命を受けるとともに、時代性を色濃く反映した作品として、ぜひ注目いただきたい一点です。

本稿では江戸、明治時代の日本絵画から2点のみ紹介しましたが、「美をたどる 皇室と岡山」展では他にも洋画、工芸など幅広い分野の作品が展示されます。皇室に収められた経緯はさまざまですが、作品はその作家たちが持てる技量を最大限に尽くしたものばかりです。貴重な作品が集うこの機会を、どうぞお見逃しなく。

*1: 大熊敏之「明治“美術”史の一断面——一九〇〇年パリ万国博覧会と帝室および宮内省——」(『三の丸尚蔵館年報・紀要』創刊号(1996年))、94頁。

*2: 三の丸尚蔵館「帝室技芸員と一九〇〇年パリ万国博覧会」(2008年)、12頁。

【特別展】「美をたどる 皇室と岡山～三の丸尚蔵館収蔵品より」(会期:2023年7月15日～8月27日[前期:7月15日～8月6日/後期:8月8日～27日] ※一部展示替えあり)

美術や美術館との「出会い」と「出口」

一利用者のコメントから

岡本 裕子(主任学芸員)



(左) 観察日記案内葉書「KanKan通信」

(右) 特別展「雪舟と玉堂一ふたりの里帰り」で実際に使われたキャプション



いものだと感じます。

日曜日は美術館の「小さな感謝祭」^{*4}に行きました。楽曲・フレーズの募集がありましたが、子どもの口ずさみを紹介していただきました。これは、2020年9月の「きっず・lab」^{*5}でキラキラ光る色水をつくって楽しみ、ご機嫌になって歌っていたときの口ずさみをたまたま録音したものです。親ばかりですが、つくるのは楽しいという気持ちが伝わってきてなかなかいいものでした。そして本人も、3年前の自分の声を聞いてそれを評価してくれる方がいてなんだか自信になったようでした。」

利用者のコメントからは、親子で美術や美術館と出会い、自分の関心を広げ、自分なりの価値観を形成しながら美術館活用が多岐にわたっていく様子をうかがい知ることができます。

美術や美術館との「出会い」を一つの目的に行う教育普及事業ですが、意外とその後の姿／「出口」を知る機会はないのではないのでしょうか。期せずして開館35周年の節目に、親子で美術や美術館と出会い、その後主体的に美術館に関わっている一つの姿をうかがい知る機会を得ることができました。それぞれの利用者にとっての美術や美術館との「出会い」と「出口」が生まれるよう、美術館の教育的側面を認識し今後も教育普及事業に取り組んでいきたいと気持ちを新たにしました次第です。

- *1: 岡山県立美術館 館ニュースNo. 132「プレ・ミュージアム事業 きっず・ミュージアム・Lab／じゅにあ・ミュージアム・Lab」
- *2: 参加者と学芸員との交換日記形式の1年間継続プログラム。「岡山の美術」展にあわせて案内葉書「KanKan通信」を参加者に郵送。受け取った参加者は、作品をみた感想や質問を「観察日記」に記入し、学芸員がそれにコメントする。
- *3: 特別展「雪舟と玉堂一ふたりの里帰り」(会期:2021年2月10日～3月14日)
- *4: 開館35周年コンサート「県美ファンに贈る 小さな感謝祭」(2023年3月25日開催)
- *5: きっず・ミュージアム・Lab(9月)「きらきら～ゆらゆら～色水にチャレンジ!!」(2020年9月19日-20日開催)

春琴帖にみる交流

森田 詩織(学芸員)

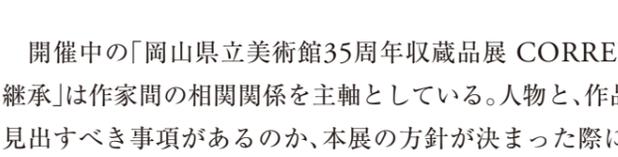


図1:浦上春琴『山水図(春琴帖)』(1831年) 第3図

開催中の「岡山県立美術館35周年収蔵品展 CORRELATION—交流と継承」は作家間の相関関係を主軸としている。人物と、作品そのものとの間に見出すべき事項があるのか、本展の方針が決まった際に抱いた不安を担当範囲において全ては解消できないまま準備を進めている。作品に関わった人々の名が制作目的や受容者などを教える重要な情報となることは確かである。浦上春琴『山水図(春琴帖)』(図1)は、最終図(図2)に「天保二年辛卯長夏、寓越中々田邨、為方齋居士作此冊」と記すが、この方齋居士なる人物について伊藤紫織氏(尚美学園大学)よりご教示をいただいた。方齋は、現在の富山県高岡市にあたる地に代々続く名家・中田村十村木澤家の儀四郎の号^{*1}。春琴は度々この家を訪れ、儀四郎や周辺の人らは彼に画を学んだという^{*2}。北陸の地には春琴の父・玉堂(1745-1820)も文化5(1808)年に旅し、加賀藩士・寺島蔵人(1775-1837)のもとを訪ねている。儀四郎は蔵人も交流があり^{*3}、蔵人を介した父子の北陸の人脈によって^{*4}、春琴は彼らと接点を持ったかと考えられる。

春琴の作品受注記録「日録」には、1828年から1833年にかけて十数回に及び儀四郎の名が登場する^{*5}。画題や形状も様々に送っていたようだが、春琴は天保2(1831)年3月末より北陸に遊んでおり、10月に帰京している^{*6}。『春琴帖』は最終図に記すとおり、越中の地で直接、儀四郎のために作られたといえよう。門人への作となれば、本帖が中国の画法や故事に基づいた図様を、その特徴を分かりやすく描く理由も想像できる。このなかで、大家の名を出す際は「意」「法」「倣」と記すのみであることに対し、第5図、第17図と具体的な画題を記す図もある点に注目したい。特に後者にて言及している明末清初の職業画家・王建章は、春琴と親しく交流した儒者・頼山陽(1781-1832)が高く評価したことで知られ、春琴もその作例を複数回見たと「清秘録 下」に記す^{*7}。大家の画法と、実際に目にして関心を寄せた筆法も用いた本帖には、春琴の学習成果^{*8}と作画態度とが表れている。

本帖は指南書に留まらず、構図や色彩に趣向を凝らす、鑑賞性に富んだ作例である。文人趣味を同じくする者たちの関係は書画を通じて広がり伝わる。現存の状態を参照してその程度を推定するのみだが、交流により生まれたものを探ることからも作品に近づいていきたい。

- *1: 中田町誌編集委員会編『中田町誌』(中田町誌刊行会、1968年)174頁、179頁
- *2: 高岡市戸出町史編集委員会編『戸出町史』(高岡市戸出町史刊行委員会、1972年)857頁
- *3: 金沢近世史料研究会編『続 島もの語り——寺島蔵人能登島流刑日記』(北国出版社、1985年)99-105頁、152-158頁

伊藤氏に賛文の翻刻と以上3点の資料についてもご教示いただきました。心より御礼申し上げます。
- *4: 岡山県立美術館・千葉市美術館『文人として生きる——浦上玉堂と春琴・秋琴父子の芸術』(2016年)78-79頁
- *5: 『浦上玉堂関係叢書 資料編Ⅱ』(浦上家史編集委員会、2020年)45-60頁
- *6: 前掲*5、280-281頁
- *7: 前掲*5、18-19頁
- *8: 前掲*4、202-206頁



図1:浦上春琴『山水図(春琴帖)』(1831年) 第3図



図2:同第24図

全図は当館所蔵作品検索システム参照 (https://jmaps.ne.jp/okayamakenbi/det.html?data_id=297)

「観察日記に継続して参加可能とのこと、ありがとうございます。お葉書をいただけますとやはり美術館に赴ききっかけになりますし、何よりコメントをいただくと様々な見方や知識に触れることができ嬉しいものです。かつては展示をみても、結局のところはタイトルと解説の文章を読みに行くのが中心のようで、我ながら釈然としないところもありました。「観察日記」ですと、課題(?)を探しながらみるといいますか、オープンな問題意識を持つてみるができるように思います。葉書の作品がどこにあるのか、探すことも宝さがしのように子どもと楽しんでます。

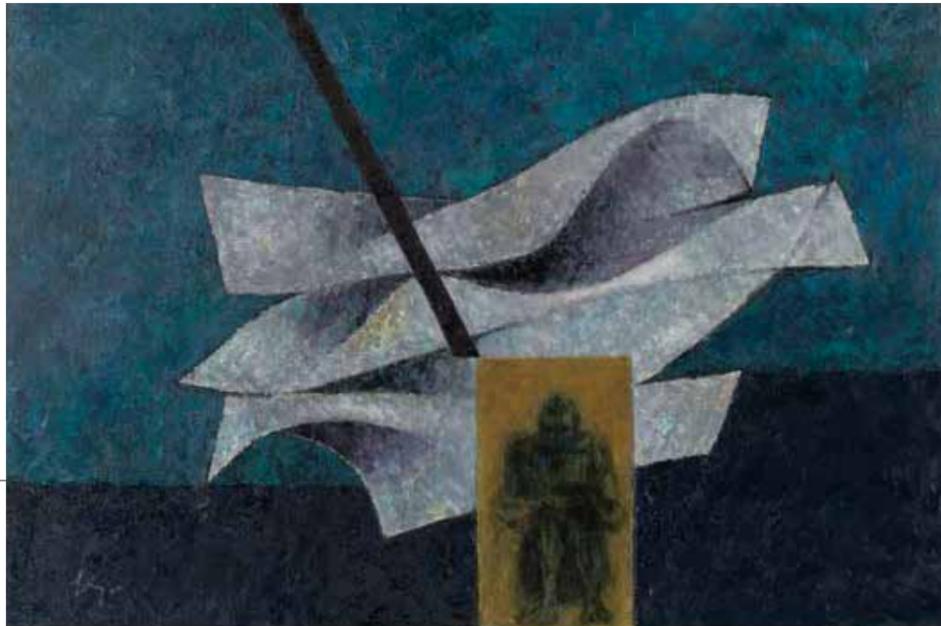
その点でいうと、特別展「雪舟と玉堂」^{*3}の作品に付けられた問いかけも同様に楽しかったです。問いかけを受けて作品をよくみたり、考え込んでみたり…。あの特別展も、ちょっと見方を変えてくれたきっかけになったように思います。

そしてこの度は、いよいよ「きっず」から「じゅにあ」に変わり、娘もドキドキしているようです。確か幼稚園の年中の終わりからお世話になっていますので、本当に早

新収蔵品紹介

File 23

竹内清《深海魚》
橋村 直樹(主任学芸員)



竹内清《深海魚》1997年 油彩・カンバス

岡山県立美術館では、昨秋、「竹内清展」を開催し、初期から晩年までの油彩画をはじめ、各種デザインの仕事や多数のスケッチ帖を展覧することによって、戦後岡山の美術界を牽引した竹内清(1911-2008)の多彩な仕事について紹介した。その会期中、ご遺族から作品寄贈の申し出があり、出品作の中から油彩画7点と、それらの下絵を含む未額装のデッサン類83枚を受贈することとなった。本稿では、竹内の油彩画の展開を略述するとともに、新収蔵品の中から、最晩年の油彩画のひとつである《深海魚》(1997年)について紹介したい。

竹内の画業の初期にあたる1940年代末から50年代にかけては、黒やグレーなど暗い寒色を基調色として、神話や造船などテーマは具体的でありつつも、個々の形が線描によって大胆に抽象化された作品が特徴的で、その後、50年代後半から60年代にかけて、赤色や黄色、緑色を基調色として画面が以前よりも明るくなっていく。60年代後半からは、傾斜した帯状の色面がひし形に重なる純粹抽象へと一時向かったのち、そこに手の形象が加えられるようになり、さらに70年代初頭まで、透明感のある明るい色彩の抽象的形と独特な線描による人物像を組み合わせる作品が続いた。その後、初渡欧を経て70年代後半から80年代になると、荘厳な中世キリスト教美術の影響を感じさせる、落ち着いた色彩と厚塗りの重厚な

絵肌や、深く美しい静謐な青色が印象的な作品が増えていく。90年代以降の晩年は、木々の魂の声や、祝祭の躍動感や高揚感など、見えないものを視覚化する象徴の絵画の傾向がより強まり、深い青色を基調色とする内省的で精神的に深化した作品へと展開していった。

ここで取り上げる《深海魚》は、1996年11月からスケッチ帖にコンテで描き始め、2002年まで296点も繰り返し描くことになる「深海魚族」と名付けられたデッサン・シリーズに関連する油彩作品である。そのシリーズ「深海魚族」では、捩じれ曲がった金属板や破れた管、あるいは貝類の殻を思わせる形が抽象化されて繰り返し描かれている。竹内の随想録によると、「深海魚族」は「抽象の形による魚たち。深海に沈んで、海面の波のまにまに活動することがなくなった自身を描いているつもりである」という。この説明は、そのまま油彩画の《深海魚》にもあてはまるだろう。つまり、深海を思わせる深い青色の画面中央の、捩じれ曲がった金属板のような青白い形は、「抽象の形による魚」であり、85歳を超えた竹内自身でもある。そして、黄色い四角に囲まれた膝を抱えて座る影のような人物は、中央の青白い「抽象の形による魚」が竹内自身であることを明示し、より一層強調している。深い青色が支配する静寂感の漂う本作は、最晩年の竹内が至った画境をよく表しているといえるだろう。

展覧会スケジュール

6月
June

5月19日|金| - 7月2日|日|

【特別展】

岡山県立美術館35周年収蔵品展
CORRELATION—交流と継承

岡山県立美術館は本年3月18日に開館35周年を迎えました。購入や寄贈等により年々深化していく当館収蔵品をすべての展示室を利用して紹介します。同時代で交流する美術、そして前の時代から後の時代へと継承する美術をそれぞれに趣向を凝らしたテーマで紐解きます。絵画、彫刻、工芸といった分野、そして古美術から現代美術までをたどる彩り豊かな展示です。どうぞお見逃しなく。

*新型コロナウイルス感染拡大に伴い、会期やイベントなどが変更になる場合がございます。最新情報は岡山県立美術館HPをご確認ください。
<https://okayama-kenbi.info>

6月11日|日| 14:00-15:30

記念講演会 「岡山県立美術館35年の歩み」

講師 守安収(当館館長)

会場 2階ホール(当日先着210名) ※聴講無料

7月
July

7月15日|土| 14:00-15:30

記念講演会 「三の丸尚蔵館
—開館30年の歩み」

講師 小林彩子氏(宮内庁三の丸尚蔵館主任研究官)

会場 RSKイノベーションメディアセンター内
能楽堂ホールtenjin9(当日先着200名)
※要観覧券(半券可)

8月
August

7月15日|土| - 8月27日|日|

【特別展】

美をたどる 皇室と岡山
～三の丸尚蔵館収蔵品より

三の丸尚蔵館は、皇居の東御苑内において、皇室に代々受け継がれた絵画・書跡・工芸品などの美術品を収蔵管理・調査・公開する施設です。本展では書跡、日本絵画、洋画、彫刻、工芸などの各分野から、同館が所蔵する皇室ゆかりの多彩な美術作品をご紹介しますとともに、岡山が輩出した作家たちによる皇室ゆかりの作品を一挙に展覧いたします。

9月
September

9月6日|水| - 9月17日|日|

第74回 岡山県美術展覧会



収蔵品の紹介 Vol. 12

平橋田中《鏡獅子》

昭和33(1958)年 木彫、彩色 高さ58cm

六代目尾上菊五郎の舞台姿。現在国立劇場にある《鏡獅子》の縮小版とも言うべき作品で、そちらの制作期間は20年以上に渡り、昭和32(1957)年に完成した。この作品は岡山県総合文化センター(現:天神山文化プラザ)に展示されていたが、岡山県立美術館の開館を祝って所有者から寄贈された。(洪)